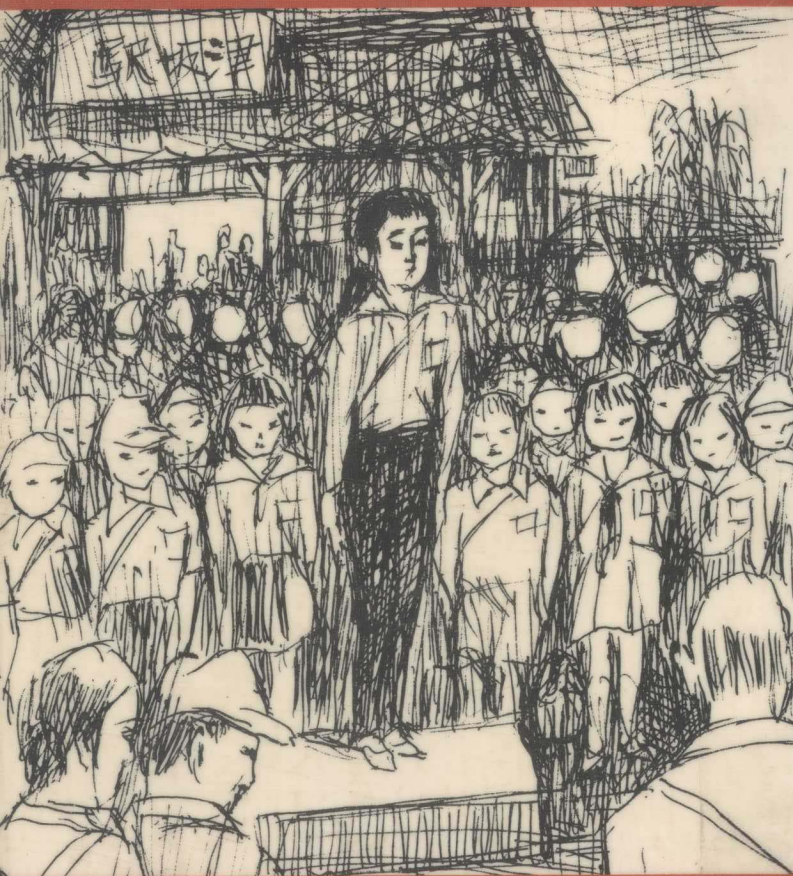


谷間の底から

柴田道子作



岩波少年文庫 3098

913 谷間の底から

柴田道子作

岩波書店 1976

342p. 18cm (岩波少年文庫 3098)

中学以上

「青い背広で」佐藤惣之助 作詞 全音楽譜

「かかし」文部省唱歌

「ふるさと」高野辰之 作詞

谷間の底から

岩波少年文庫 3098

1976年 7月 9日 第1刷発行 ©

1976年 11月 25日 第2刷発行

¥ 400

作 者 しば た みち こ
柴 田 道 子

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行者 岩 波 雄 二 郎



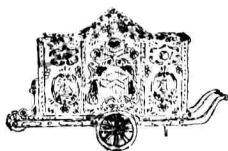
発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111 振替東京 6-26240

落丁本・乱丁本はお取替いたします

印刷：三陽社 製本：田中製本

谷間の底から

柴田道子作



岩波少年文庫 3098

はじめに

あすは、もっと幸福になれますように。
あすは、もっと力強くなれますように。
いきいきとした心と、勇氣ゆうきを持てますように。

柴しば
田た
道みち
子こ

もくじ

第一部 とざされた世界

1	小さなねがい	9
2	とまどい	27
3	「夕映」の部屋	47
4	仲間はずれ	65
5	白い塔の中	80
6	ほんとうの声だった	97
7	鉛筆部隊	117
8	別々の出発	142

第二部 新しく生きる

1	礪波の土	163
2	あとからつづく子どもたち	182
3	ふる里の歌	199
4	脱走	217
5	仏様だけは知っている	244
6	影のある夏	265
7	つみとられた花	287
8	すべてが始まるとき	305
	解説	
	鶴見俊輔	
	深沢省三画	

第一部 とざされた世界





1 小さなねがい

ときおり、かすかな爆音^{ばくおん}が、神経質^{しんけいしつ}にガラス窓^{まど}をふるわせていた。なまあたにかい、うるんだ夏の夜風が、あけはなたれた部屋^{へや}部屋^{へや}にしのびよる、外は星くずが歌う晩^{ばん}だった。千世子^{ちせこ}は縁側^{えんがわ}にあおむけにねそべって、垣根^{かきね}ごしに、小さな庭をわたってくるバイオリンの音色に、心のいらだちをまかせていた。

（きょうのはワルツかしら、メヌエットかしら、それとも、わたしの知らない外国の歌曲^{かきょく}かな？）

千世子^{ちせこ}はこうして、毎晩^{まいばん}、夕食後のひとときを、となりの麻子^{あさこ}おねえさんのバイオリンに、耳をかすのがすきだった。音楽^{おんがく}つうの栄造^{えいぞう}にいさんがまだ海兵^{かいへい}に入団^{にゅうだん}しなかったこの春までは、（きょうのは、パッハのアリア、きょうはモツアルトだ、チャイコフスキーだ。）と毎日たしかめるこ

とができたが、今では勝手に想像するだけになってしまった。麻子おねえさんのバイオリンは、いつも千世子に語りかけてくるように感じられる。

「ああ、このバイオリンも、あと幾日ものこさないで、きくことができなくなるのだわ。今晚のはまた、なんてすばらしいのだろう、わたしの不安をとりのぞいてくれるようだ。しずかに、魂をふるわせるようだ。」

集団疎開が発表された七月二十日（一九四四年）から、家中の目が、千世子にそそがれているのを、千世子は知っていた。あすは疎開に参加するか、しないかの最終決定日だ。千世子の家でも、横須賀からわざわざ栄造にいさんまでよびよせて、家族会議がひらかれることになった。

「なんだ、千世坊ここにいたのか。茶の間でみんなが待ってるよ。」

下から見あげると、ノッポの栄造にいさんは、ますますノッポに見える。

「ふふ……栄造にいさんは電信柱みたい。」

「こら！ なぜだ。」

ちよっぴりおこったふりをして、栄造にいさんは、かるがると千世子をだきあげた。

「だって、にいさんの黒ぶちの眼鏡、トランスみたいよ。それに、ノッポ。」

千世子は、最後のノッポを小声でいった。

「にいさん、あれなんの曲？」

千世子は、栄造にいさんの胸の中で、いくぶん首をかしげてみた。しばらくして、

「ぼくの大すきな曲、ベートーベンのへ長調ロマンスだ。」

「わたし、うっとりしちゃったのよ。ゆめを見ているようだったわ。たぶん、栄造にさんもすきな曲だろうと思ってたのよ。」

「ふふふ……千世坊は、あいかわらずオナマちゃんなんだね。」

そういつて、栄造にさんは、千世子をだいたまま、茶の間にはいった。

「かあさん、おとなりのバイオリン、だいぶ上達しましたね。」

「そうね。毎晩よくつづくわ。先日は、警戒警戒中にひいていて、群長さんに注意されてたわ。この非常時に音楽ツラないでしょ、ですって。」

「麻子さんの気持も、さっせられますよ。」

こういつて、栄造にさんは、思いきり、千世子を強くだきしめると、ストンと畳の上におろした。

「戦争の情勢はどうだね、栄造。」

「サイパンをやられてから、内地もきんぱくしてきましたね。先輩の話だと、今年がやまだとありますが、どんなやまになってくれるのやら……悪くいくと、本土の空襲はのがれられないのではないかな……。」

「あまり、暗い予想はたてぬことだ。自分のおかれた場所で、せいっぱい生きることが大切だ。」

おとうさんは、ゆかたの袖口で眼鏡のレンズをふきながら、しずかにいった。

「それが、おとうさん、ぼくにはやっぱり悩みなんですよ。今の状態にどのようにして役立ってゆくかが、ぼくの現在の第一の問題になってしまった。でも、やりぬいてみますよ。戦争、戦争、それは、自分にとってあまりにも強い、宿命……。」

栄造にいさんは、千世子と、目がカチリとあつて、ことばをとめてしまった。にいさんは、新聞を裏がえしたり、また表にかえしたりしながら、

「おとうさん、会社のほうはどうなのですか。」

と、きいた。

「まあ、まあだね。軍需品のほうへ生産をきりかえつつあるようだ。今、航空照明器具を作っている。」

千世子のおとうさんは、大糸製作所の経理部につとめていた。

「栄造や、千世子のことなんですけどねえ、集団疎開のことどう思う？」

おかあさんは、さつきから、話を千世子のことにもどしたかったのだ。おかあさんはこのところ毎日、近所や、婦人会の友だちの家をあちこちと、へおたくのおじょうさんは？ おたくのぼっちゃんは？ 集団疎開させますの、それとも縁故に？ やはり東京に、まだおいておられますの？ときいて歩いていた。はては親戚のおばさんにまで電話で、おうかがいをたてるしまつ。千世子を疎開に参加させることについて、家中で一番心配しているのは、おかあさんであること

を千世子は知っていた。

「都内には、現在三十万の学童がいるというけど、いったいどこに疎開させるのかな。」

「第一、その行先がわかってないのですよ。学校そのものが疎開地にうつるといふし、そうしたら、残留の子どもの授業だってどうなるかわかりませんわ。」

おかあさんは、ひとりでやきもきしているようだ。千世子の家には、疎開していく田舎の親戚がない。石川県の金沢市におばさんがいたが、めぼしい都市のほとんどが、疎開の指令を受けていた。そのために、金沢へいくこともできない。おとうさんも、おかあさんも、いろいろ考えたが、どんなに考えてみてもよい案がうかばなかった。だからどうしても集団疎開にいかねばならない。

「あとで個人的に参加させることも、それから、いったん参加させたら、理由なくやめることもできないというし……。」

「そりゃあ、そうですね、おかあさん。集団生活には、規律をまもることが何よりも大切なのですから、当局が発表から参加決定日まで、あまり猶予期間をおかないのも、わけがあると思うな。」

栄造にいさんのことには、重みと、さしせまった感じがあった。

「かわいい子には旅をさせ、というね。こんど場合はそれとはちがうが、戦局の重大さを考えると、国家の方針だから、うちの子だけやめるといふわけにはいくまい。この時世に、個人の

つごうだけで、ものを考えてはいかんな。」

「あなたは、いちにも、ににも、国策だとか、国の方針だとかおっしゃるけど、千世子が病弱だと思つと、わたしは、おとうさんのようには、わりきれないですよ。」

「おかあさん。わたし五年生よ、風邪ひかないように、ねびえしないように注意するからだいじょうぶよ。わたしの組でも、集団疎開の発表があつてから、縁故疎開すると、はっきり決めた人、十一人もいるのよ。」

今まで、だまつてみんなの会話をきいていた千世子は、とつぜん口をはさんだ。おかあさんは思いあまつたように、

「千世子だいじょうぶかしら、お家のようにはいかないのよ。」
と、千世子をしげしげと見つめていった。

「だって、千世子、約束しちゃったわ。道雄ちゃんや、久子ちゃんと、それから……青木先生とも……みんないっしょですもの、きつと楽しいと思うわ。」

小さいときから、家の中で、ミソツカスあつかいされていた末っ子の千世子は、からだが弱いという理由で、みんなから、のけ者あつかいや、らくご者にされるのはさんねんだった。

「からだが弱い、これは、まったく集団生活の中ではこまるでしょうね。やつぱり、わたしは、おかあさんの気持もわかるわ。」

縁側に出て、ぬいものをしていた久美子ねえさんが、おかあさんのほうに顔を向けていった。

千世子は五つのとき、百日せきで重くわずらってから、アレルギー性といわれる普通とはちがう体質になり、それに神経過敏もてつだって、冬には、つめたい風にあたっても風邪をひく。夏には、少しねびえをしても風邪をひく。季節のかわりめには、きまって気管支の発作を起こしていた。

「千世坊のは、あま、えん病もはいつているのだね。かあさんが、だいじにしすぎるから……集団の中でもまれれば、あんがい、じょうぶになるかもしれないよ。かあさん、思いきって、参加させてみたらよいのではないかな。千世子だって、その気になっているらしいから。」

そういう、おとうさんのことばにつづけて、栄造にいさんもいった。

「それに、敵の基地がサイパン島にどんどんできてる今では、今晚にでも、あすにでも、爆弾をつんで東京の空にこないともかぎりませんよ。ボカボカ始まってからでは、おそすぎますよ。」

「そうねえ、けっきょく、そういうことになるのでしょうね……。」

おかあさんの声には、心なしか、気のぬけたようなひびきがあった。

九時近くなって、匡衛にいさんが帰宅した。中学校から、近くの強制立退の家屋を整理するために動員をうけたのであった。

「もう千世ちゃんのお時間よ、ねなくては。どうも疎開には参加すると決まったらしいから、安心しておやすみなさい。」

おかあさんは、匡衛にいさんたちの食事の用意で、台所に立っていった。